

離乳食場面に見られる父子・母子の情動表出の特徴と幼児期の 父親・母親に対する子どものアタッチメント安定性との関連

福田 佳織・森下 葉子・尾形 和男
(東洋学園大学) (文京学院大学) (埼玉学園大学)

和文要約

本研究では、離乳食場面における父子、母子それぞれの情動表出の特徴、乳児のネガティブな情動表出直後の父親・母親の情動表出の特徴を捉え、それらが幼児期の父親・母親に対する子どものアタッチメント安定性とどのように関連するかを検討した。まず、生後9ヵ月以内の乳児のいる家庭にて、親が乳児に離乳食を与える様子をビデオ撮影した。そして、その対象児が2歳前後の時点で再度家庭訪問し、親へのアタッチメント安定性をAQSにて測定した。2時点での父母データが揃っている4組(8ケース)を対象に、①父子および母子の各種情動(ポジティブ・ニュートラル・ネガティブ)表出頻度(率)、②乳児のネガティブな情動表出直後の父親および母親の各種情動表出頻度(率)を算出した。そして、これらの特徴と幼児期の子どものアタッチメント安定性との関連を検討した。ケース数が少ないため統計処理は行っていないが、乳児の明瞭な情動表出と親のポジティブな情動表出の均衡が取れているケースにおいて、子どものアタッチメント安定性が高い可能性が示された。一方、アタッチメント安定性の低い子どもとその親に限った特徴は、今回は示されなかった。

キーワード

アタッチメント 情動 離乳食 乳児

問題と目的

これまで、アタッチメントの質の予測因として最も重視されてきた要因の一つが親の感性である。特に生後2年間における母親の感性は、その後の子どもの言語能力や協調性、従順さ、アタッチメント等、様々な能力の予測因となっている(Beijersbergen et al., 2012; NICHD Early Child Care Research Network, 2001, 2004, 2008; Sroufe et al., 2005)。感性とは、養育者が乳児のシグナルに気づき、正しく解釈し、適切かつ迅速に対応するという養育者側の能力を指す(Ainsworth et al., 1978)。しかしながら、子どものアタッチメントに及ぼす養育者の感性の影響力はそれほど大きくなく(Goldsmith & Alansky, 1987)、メタ分析において、その効果量がわずか $r = .24$ であることが明らかにされた(De Wolff & van IJzendoorn, 1997)。

その要因の一つに敏感性の多義性(近藤ら, 2006)があると言われ、近年では、敏感性の様々な派生概念とアタッチメントとの関連性も検証されている(篠原, 2015)。例えば、内省機能(reflective function)(Fonagy et al., 2002)、洞察性(insightfulness)(Oppenheim, et al., 2001)、心を気遣う傾向(mind-mindedness)(Meins et al., 2013)などが挙げられる。

確かに、これらの概念とアタッチメントの質とは関連性が見られるが、いずれも親のインタビューを用いたデータが中心となっており、親によって言語化された表象が扱われている。また、親子のリアルタイムの関わりから切り離されており、子どもへのダイレクトな影響が見えにくいといえる。さらに、親の特性に焦点化しており、親子二者間の特性が扱われていない。Sameroff(2009)のトランザクショナルモデルでも示されるように、親子のやり取りにおいて、親は子どもの特徴からの影響を受けており、子どもの特徴が親の養育行動に影響を与えていることを実証する研究報告は多い。例えば、高橋・野々部(2018)は、子どもの世話のしにくさや順応性の低さが母親の一貫性のない養育へ、さらには、子どもの全般的な不安へと関与することを示している。アタッチメントにおいても、それは例外ではなく、子どものアタッチメントへの影響要因を検討する上では、親の特徴のみならず、子どもの特徴も踏まえた分析が必要になると考えられる。

そこで、本研究では、リアルタイムでの親子のやり取りの中に見られる親の特徴と子どもの特徴に着目して分析することとする。

では、親および子どもの特徴のどのような側面に着目すればよいただろうか。その手掛かりとなる概念として、情緒的利用可能性(emotional availability)^{注1)}(Mahler, Pine, & Bergman, 1975)が挙げられる。これは、上述した敏感性の拡大概念とも言え、アタッチメント理論(Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)は、この情緒的利用可能性の概念の重要な基盤である(Biringen et al., 2014)といわれている。

本研究では、上記の視点を参考に、親子の相互作用場面に見られる行動の記述を行う。そして、これらの記述に基づき、①父子および母子の情動(ネガティブ・ポジティブ・ニュートラル)表出頻度(率)、②乳児のネガティブな情動表出直後の父親および母親の各種情動表出頻度(率)を算出する。Biringen & Easterbrooks(2012)によれば、「親の敏感性」は以下のように説明されている。

これはアタッチメントにおいても重要視された要素であるが、二者関係の情動性の側面から敏感性を捉える。例えば、子どもが強く反応しているにもかかわらず親が適切に関わらなければ敏感性は低いと評定されるが、それだけではなく、親が一見適切に関わっているように見えても、子ども側が離れたり反応したりしなければ、やはり敏感性が高いとは評価できない。また、言語的感情表現と非言語的感情表現が不一致の場合、敏感性が低く評価される。例えば、笑顔だが声のトーンが冷たい、ポジティブな言葉に対して感情が平板、表情はポジティブだが声の調子が焦っているなどがそれにあたる。行動と言語・非言語表現が不一致の場合も同様である。さらに、子どもの感情表現を認識し、それに対して親が適切に反応することも重要であり、やり取りのタイミングやリズム、柔軟性、バリエーション、創造性への同調、子どもを受け入れる姿勢などにも着目する。

これらを参考に、父子、母子が離乳食場面で表出するそれぞれの情動表出頻度のみならず、乳児の強い反応（ここでは、ネガティブな情動状態を扱う）に対して、父母がどのように関わるか、つまり、父母は自らポジティブな情動を表出して、乳児の情動を調整しようとするかに着目して検討する。なお、情緒的利用可能性では、「子どものポジティブな情緒の同調」も強調 (Emde & Easterbrooks, 1985) しているが、本研究では、極端にポジティブ情動の表出が少ない乳児もいるため、ネガティブ情動のみを扱うこととする。

では、子どものアタッチメントに影響する親子の特徴を捉えるにあたり、適した対象児の年齢（月齢）はいつ頃であろうか。また、親子の相互作用はどのような場面を取りあげるのがよいであろうか。アタッチメントの発達、誕生時からの養育者等とのやり取りを通して形成される。そして、生後6、7ヵ月頃からその子どもにとっての初期のアタッチメント人物が定まり、徐々にその人物に対するアタッチメントの質の個人差が明確になる。アタッチメントの個人差の測定に用いられるストレンジシチュエーション法 (SSP) やアタッチメントQソート法 (AQS) は、いずれも対象年齢が1歳からとなっており、その時期にアタッチメントの個人差が明確になることがわかる。したがって、アタッチメントへの影響を検討するには、アタッチメントの質の形成途上にある月齢、つまり、1歳未満の子どもとその親の相互作用を観察することが適しているであろう。また、親子の相互作用場面としては、親にとって葛藤的な状況を用いることで、感受性はより正確に測定される (Smith & Pederson, 1988) といわれている。ベネッセ教育総合研究所 (2018) によれば、幼い子どもを持つ母親にとって、「離乳食・幼児食の与え方」は子育ての悩みで最も高いことが指摘されている。離乳開始期である生後5、6ヵ月頃を過ぎると、乳児は意思をもって行動することができるようになる。食事への集中が切れたり、眠くなったり、じっとしていたくなくなったり、食べなくなったりすると、乳児は、あらゆる摂食外行動（親が口元に運んだ食べ物を食べない行動）を示して食事を中断しようとする。福田・森下・尾形 (2020) は、乳児への食事供給行動（食べ物を乳児の口元に運び、食べさせようとする行動）に対する乳児の摂食行動（口に入れ飲み込む行動）は、個人差は大きいものの父母ともに3割程度であることを示した。このように、離乳期における食事場面では乳児はあらゆる欲求を示すため、親に葛藤が生じやすい場面といえる。つまり、離乳食場面における親子の相互作用を観察することが適していると考えられる。ただし、池谷・柳沢 (2017) によれば、子どもの手づかみ食べ得点が最も高い月齢は生後10ヵ月であるという。離乳食の大半を子どもが手づかみで食べる状況と親が子どもの口に運ぶ状況とでは、親の葛藤内容が変わってくる可能性がある。そこで、できるだけ状況の統一を図るため、対象児の月齢の上限は1歳ではなく、生後9ヵ月までとする。

そして、アタッチメント安定性への影響を検討するため、上記の月齢で離乳食場面の観察に協力いただいた親子には、対象児が2歳前後になった時点でAQS (Waters & Deane, 1985) を用いてアタッチメント安定性を測定する。

上述した視点に基づき本研究では、乳児期の父子・母子のデータおよび2歳前後での対父親・対母親のAQSデータのすべてが揃っている4組（8ケース）親子を対象に、乳児期の親子の情動表出の特徴と幼児期の子どものアタッチメント安定性との関連について検討する。

方 法

(1) 対象者

関東圏在住で、対象児が離乳食期（離乳食開始期～生後9ヵ月）に離乳食場面の観察を終え、その後、対象児が2歳前後でアタッチメントの測定を実施した親子のうち、父親・母親に対する子どものアタッチメント安定性データが得られた4組（8ケース）を分析対象とした。4名の対象児の属性およびAQS得点（z変換後）は、Table 1のとおりである。AQSでは、 $r = .30$ 以上は安定型、それより低い場合は不安定型とされる。

Table 1 対象者の属性およびAQS得点

	子性別	調査①子月齢	調査②子月齢	父年齢	母年齢	対父AQS	対母AQS
ケースA	女	8ヵ月	1歳8ヵ月	30代	30代	.514	.250
ケースB	女	8ヵ月	2歳7ヵ月	20代	20代	.443	.833
ケースC	男	8ヵ月	2歳4ヵ月	40代	30代	.457	.438
ケースD	男	9ヵ月	2歳3ヵ月	30代	30代	.502	.271

(2) 調査期間

2017年9月1日～2020年2月2日に調査を実施した。

(3) 調査手続き

著者の知人等を通して協力者の候補となる家庭に調査の概要を伝えた。そして、了承を得た家庭に対し、著者よりメールまたは電話連絡をした。その際、調査の詳細について書かれた説明書をメール添付または郵送し、その後、協力者の質問に応じた。その上で、最終的に調査協力を了承した家庭と調査日時のアポイントを取り、その日時に調査者が1人で家庭訪問した。訪問時、調査者から今回の調査についての詳細を再度説明し、了承を得た場合に調査承諾書に署名をもらった。家庭訪問では、観察調査（ビデオ撮影）、および、質問紙調査、インタビュー調査を行った（順番は、協力者の都合によって異なる）が、本論文では、観察調査データのみを使用するため、質問紙調査、インタビュー調査の内容は割愛する。ただし、質問紙調査により得られた属性に関する情報（親の年代、および、子どもの月齢・性別）は使用する。

撮影は第一または第二執筆者が行った。撮影にあたっては、食事を与える親と乳児の二人きりの場面とすること、食事を食べきる必要はないこと、時間の制限を設けないことを説明した。撮影は、親子の顔ができるだけよく見える場所から撮影された。

対象児が2歳前後になった時点で、父親または母親に連絡を取り、アタッチメント測定（AQS）の調査協力を依頼した。承諾した家庭に、第一執筆者、第二執筆者、執筆者以外の研究者（AQS熟達者）のいずれか2名で訪問し、1時間半～2時間の日常場面の観察を行った。雨天以外は、屋内と屋外（公

園、スーパー、散歩等)で観察し、必要に応じて観察者が幼児に声をかけて反応をみた。父子の観察と母子の観察は、2週間以上の期間を空けて実施した。観察後は、観察者が独立でカードをソートした。そして、ソートに大きな食い違いがあった箇所は、話し合いによりカードの位置を調整した。その後、各児のアタッチメント安定性得点を算出した。

(4) 映像データの分析方法

分析映像の長さを統一するため、食事開始から1分間、食事中盤の1分間、食事終了までの1分間の計3分間を分析対象とし、そこで見られる親および乳児の行動の特徴を時系列で記述した。ただし、対象の親子以外の者が入ってきた場面(例えば、母子観察中に、乳児の視界に入る場所に父親が入ってきた場合など)の時間は含めなかった。

記述内容は、Biringen & Easterbrooks (2012)を参考に、①親の身体的な動き、②親の発話内容、③親の発話のトーン、④親の視線、⑤親の表情、⑥乳児の身体的な動き、⑦乳児の発声、⑧乳児の表情、⑨乳児の視線とした。③⑤⑦⑧については、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブの3種について記述の上、強弱がわかるよう「やや」等の表現も用いた。記述は親と子どもの行動が交互になるようにし、記述と記述の間はすべて1秒未満とした(1/100秒単位で秒数も記載した)。記述する上で、親と乳児のいずれが先行刺激になっているのかわかるように留意した。そのため、記述間は等間隔にはなっていない。また、親の発話については、親の1ターン内に収まらない場合、次の親のターンに続きの発話内容を記述した。乳児のターンで親の発話が終わってしまう場合は、親の1ターン内に発話内容をすべて記述した。また発話を2ターンに分ける場合は、意味がわかるよう区切って記述した。

いずれのケースにおいても、第一執筆者または第二執筆者が行動コーディングシステム(BECO 2)で、動画のコマ送り(33/100秒単位)や1/8倍速再生等を用い、1エピソードごとに複数回視聴の上、通常再生して、やり取りの文脈や発話に齟齬がないかを繰り返し確認して記述した。

これらの記述を終えたのち、第一執筆者の記述は第二あるいは第三執筆者が、第二執筆者の記述は第一執筆者が、動画視聴しながらチェックした。記述内容に疑義があった場合は、三者で動画と記述を確認し、より適切な記述について話し合い、記述の修正を行った。

これらの記述に基づき、本研究では、親子それぞれのネガティブ・ポジティブ・ニュートラル情動表出の頻度・割合の算出、乳児のネガティブ情動表出直後の親の各種情動表出の頻度・割合の算出を行った。

(5) 人権の保護及び法令等の遵守への対応

調査にあたっては、対象者に「研究に関する説明書」(本研究の目的や内容、データの扱い、謝金、データ撤回等についての詳細が書かれた書類)を手渡し、調査者がそれを読み上げる形で対象者が確認した。これらの内容に十分な理解と了解を得られた場合に限り、「調査承諾書」への署名をもらい、調査に参加してもらった。また、承諾後も、対象者には何の不利益もなく、いつでもデータを消去できる自由があることを説明し、撤回書も配布した。

結 果

(1) 父子および母子の各種情動表出頻度(率)と幼児のAQS得点

父子および母子の離乳食場面の序盤・中盤・終盤の各1分間(計3分間)に見られた父親、母親、乳児の各種情動表出頻度(率)、および、幼児期の子どものアタッチメント安定性を示したものが、Table 2である。ここでは、父親-乳児、および、母親-乳児の離乳食場面において、それぞれがどのような情動を表出しやすかったかという点とAQS得点との関連性について見ていく。

乳児の特徴としては、A児、C児、D児の情動表出率は比較的類似しており、いずれも、母親に対するポジティブな情動表出は10%台、ニュートラルな情動表出は60~70%台、ネガティブな情動表出は10~20%台となっている。3児の母親に対するAQS得点は、A児およびD児は低く不安定型であるが、C児は中程度で安定型である。父親に対する3児のポジティブな情動表出率も類似しており、いずれも一桁である。3児の父親に対するAQSはいずれも中程度で安定型である。一方、B児は他児と比べてポジティブな情動表出が多く、ネガティブな情動表出も比較的多い。特に、母親に対してのポジティブ情動とネガティブ情動の表出が多い。B児は、父親に対するAQSは中程度の安定型であるが、母親に対するAQSは非常に高い安定型である。

親の特徴としては、A児・B児の母親はポジティブな情動表出が多く、D児の父はポジティブな情動表出は少ないことがわかる。また、母親に対するアタッチメント安定性の低かったA児とD児に着目すると、ともに、父親とのアタッチメント安定性は高く、父親のポジティブ情動表出が母親に比べて少ないことがわかる。さらに、ネガティブな情動表出は全体的に少ないが、A児父、B児母、C児父、D児父、D児母において数回表出されている。

Table 2 父子および母子の離乳食場面における各種情動表出頻度(率)と幼児のAQS得点

		A児				B児			
AQS	$r=.514$	$r=.250$		AQS	$r=.443$		$r=.833$		
episode	父164	子163	母173	子173	episode	父168	子167	母169	子168
P	66(40.24)	7(4.29)	106(61.27)	28(16.19)	P	75(44.64)	56(33.53)	93(55.03)	72(42.86)
Neu	96(58.54)	137(84.05)	67(38.73)	122(70.52)	Neu	93(55.36)	81(48.50)	69(40.83)	48(28.57)
N	1(0.61)	17(10.43)	0(0)	18(10.40)	N	0(0)	30(17.97)	3(1.77)	44(26.19)
不明	1(0.61)	2(1.23)	0(0)	5(2.89)	不明	0(0)	0(0)	4(2.37)	4(1.19)
		C児				D児			
AQS	$r=.457$		$r=.438$		AQS	$r=.502$		$r=.271$	
episode	父162	子162	母169	子171	episode	父173	子172	母169	子169
P	52(32.09)	2(1.24)	62(36.69)	25(14.62)	P	38(21.97)	8(4.65)	65(38.46)	22(13.02)
Neu	106(65.43)	124(76.54)	99(58.58)	107(62.58)	Neu	132(76.30)	112(65.12)	98(57.99)	105(62.13)
N	2(1.24)	36(22.22)	0(0)	34(19.88)	N	3(1.73)	52(30.23)	1(0.59)	42(24.85)
不明	2(1.24)	0(0)	8(4.73)	5(2.92)	不明	0(0)	0(0)	5(2.96)	0(0)

乳児の情動表出の特徴とアタッチメント安定性との関連については、B児のように情動表出が明瞭であることとアタッチメント安定性の高さとは関連があるのではないかと推測される。一方、親の情動表出の特徴とアタッチメント安定性との関連については、明確な特徴は見られなかった。

親と子の組み合わせで検討すると、ポジティブ・ネガティブともに明瞭な情動表出をするB児とポジティブな情動表出の多い母親という組み合わせ、つまり、互いの明瞭な情動表出の均衡が取れていることも、幼児のアタッチメント安定性に関連する可能性があるのではないかと考えられる。しかしながら、均衡が取れていることが明らかなのは、このケースのみであるため、同様のケースを追加して再検討する必要があるだろう。

(2) 乳児のネガティブな情動表出直後の父親および母親の各種情動表出頻度(率)と幼児のAQS得点

ここでは、乳児がネガティブな情動を表出した直後に、親がどのような情動を表出するかという親の特徴を捉える。つまり、乳児がネガティブな情動を表出しても、親がその情動に巻き込まれることなく、乳児のネガティブな情動を調整しているかに着目する。Table 3は、各乳児がそれぞれの親に対して表出したネガティブ情動の頻度、および、その直後に見られた親の各種情動表出(P表出、Neu表出、N表出、不明)の頻度(率)を表している。

ところで、乳児が表出するネガティブな情動が極端に少ない場合、それに続く親の情動の表出率は、極端な数値を示しやすくなる(例えば、乳児がネガティブ情動を1回しか表出していない場合、その直後の親の情動がポジティブであると、ポジティブ表出率が100%になってしまう)。今回の対象乳児のネガティブな情動表出頻度は最低でも17回であるため、上記の例ほど極端な数値にはならないと考えられる。

まず、A児の父母およびB児の母は、乳児のネガティブな情動表出の直後、半数以上、ポジティブな情動を表出していることがわかる。B児の父も、比較的ポジティブ情動が多い。また、C児、D児の父母とも、20%台後半~30%台後半であるが、極端に低いケースは見られなかった。

母親へのアタッチメント安定性が最も低いA児の母親と最も高いB児の母親とが、ほぼ同程度のポジティブな情動を表出していること、また、C児の母親は、本研究においては、乳児のネガティブな情動表出直後のポジティブな情動表出率が低いが、C児の母親に対するアタッチメント安定性は低いとは言えないことから、乳児のネガティブな情動表出直後の親のポジティブな情動表出の特徴とアタッチメント安定性との関連は見い出せなかった。

なお、乳児のネガティブな情動表出で行動記述が終了している箇所があるため、親の対応数と若干ズレが生じている箇所がある。

Table 3 乳児のネガティブ情動直後の父親・母親の各種情動表出頻度(率)と幼児のAQS得点

	A児		B児		C児		D児	
AQS	r=.514	r=.250	r=.443	r=.833	r=.457	r=.438	r=.502	r=.271
N頻度	子→父 17	子→母 18	子→父 30	子→母 44	子→父 36	子→母 34	子→父 52	子→母 42
P表出	10(58.82)	10(55.56)	12(40.00)	22(51.16)	13(36.11)	10(29.41)	20(38.46)	15(35.72)
Neu表出	7(41.18)	8(44.44)	18(60.00)	17(39.53)	22(61.11)	22(64.71)	32(61.54)	25(59.52)
N表出	0(0)	0(0)	0(0)	3(6.98)	1(2.78)	0(0)	0(0)	0(0)
不明	0(0)	0(0)	0(0)	1(2.33)	0(0)	2(5.88)	0(0)	2(4.76)

考 察

(1) 父子および母子の情動表出頻度(率)と幼児のアタッチメント安定性について

まず、父子、母子が離乳食場面で表出するそれぞれの情動表出頻度と幼児のアタッチメント安定性との関連について検討した。その結果、乳児の情動表出が明瞭であることとアタッチメント安定性の高さとの関連する可能性が窺えた。また、親と乳児の明瞭な情動表出について、親子の均衡が取れていることも、幼児のアタッチメント安定性に関連する可能性があるのではないかと考えられる。

先述の通り、Ainsworth et al. (1978)の示す養育者の敏感性は、乳児のシグナルに気づき、正しく解釈し、適切かつ迅速に対応するという能力を指す。これは単に親の能力のみならず、乳児のシグナルの明瞭さも関与するだろう。つまり、情動表出が明瞭であるという乳児の気質は、親にその情動や意図を気付かせ、より正確に解釈してもらうために有利に働くといえる。当然、乳児のシグナルが明瞭であっても、それに適切に応答するか否かは親側の要因となる。本研究におけるB児の母親の高頻度のポジティブな情動は、乳児のネガティブな情動表出直後（結果に記載はないが、乳児のポジティブな情動の直後にも）によく表出している。これは、B児の情動状態の明瞭さが、母親の乳児に対するネガティブ情動の調整、ポジティブ情動への共感を引き出したとも考えられる。こういった母親の対応が、B児の母親に対するアタッチメント安定性の高さにつながっているのではないかと推測される。もちろん、先述のとおり、これは1ケースの特徴であるため、同様のケースを追加して再検討する必要がある。

(2) 乳児のネガティブな情動表出直後の父親および母親の各種情動表出頻度(率)と幼児のアタッチメント安定性について

次に、乳児がネガティブな情動を表出しても、親がその情動に巻き込まれることなく、乳児のネガティブな情動を調整しているかを明らかにするため、乳児のネガティブな情動表出直後の親の情動表出頻度(率)を算出した。その結果、乳児のネガティブな情動表出直後の親のポジティブな情動表出の特徴と幼児のアタッチメント安定性との関連は見い出せなかった。

先述の通り、Biringen & Easterbrooks(2012)は、「親の敏感性」として二者関係の情動性の側面から

捉えているものの、単に情動表出の種類のみならず、子どもの反応の強さと親の適切な関わり、子どもの関わりを受けた後の子どもの反応、やり取りのタイミングやリズム、柔軟性、バリエーション、創造性への同調、子どもを受け入れる姿勢など、本研究で取り上げていない側面にも着目している。本研究においては情動表出に焦点を当て、それらを3つの情動に振り分けて分析を行った。しかし、それだけでは、十分には微細な分析ができなかった可能性がある。福田・森下・尾形(2022)では、乳児のネガティブな情動表出後の母親の対応について示し、アタッチメント安定性の高い子どもの母親と低い子どもの母親とで、対応のバリエーションが異なること（前者の方が、バリエーションが豊富）などの相違を報告している。このように、親の情動のみならず、様々な行動による親の対応と幼児のアタッチメント安定性との検討も必要であろう。

また、乳児のネガティブ情動に対する母親の調律的応答について、蒲谷(2013)は、母親自身のアタッチメントが安定傾向である場合、ポジティブ情動を伴った心的言及を行いやすかったのに対し、不安定傾向の母親は、心的言及をしにくい、あるいは、心的言及を含まない笑顔の表出などをしやすかったとしている。このように、同じポジティブ情動の表出であっても、その内容には差異が見られる。このことから、情動種を一括りにするのではなく、さらに細分化した分析を試みることも重要であると考えられる。

今後の課題

本研究の結果から、乳児の情動表出が明瞭であることや、親と乳児の明瞭な情動表出の均衡が取れていることが、その後のアタッチメント安定性に関連する可能性が見い出された。

しかし、今回の分析対象は少なく、その上、アタッチメント安定性の高い幼児が少数であったことから、今後は、ケース数を増やして検証していく必要があると考えられる。また、親の情動表出のみならず、その他の観点も追加したり、ポジティブ情動を一括りにせず同種の情動を細分化して分析したりといった、改善点も見い出された。今後は、こうした点を踏まえて、幼児のアタッチメント安定性への影響要因を検討していくこととする。

注1) 情緒の利用可能性は、親の敏感性、親の構造化（遊びの環境を整えたり、自主的な活動をサポートしたりする能力）、親の非侵入性、親の非敵意性、子どもの反応性、親への子どもの関わりなどの6つの視点から構成されている。この情動の利用可能性尺度は、0～14歳の子どもおよびその親の特性を測定するものである。また、この尺度を用いた測定を行う場合は、特定のトレーニングと認証が必要であり、その受講者のみが尺度の詳細なマニュアルを入手することができる（International Center for Excellence in Emotional Availability (EA)® HP）。

謝辞

本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究(C)(一般)課題番号17K04366、研究代表者：福田佳織）を受けた。また、調査の実施にあたり、ご協力を頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Oxford: Lawrence Erlbaum.
- Beijersbergen M., Juffer F., Bakermans-Kranenburg M., van IJzendoorn M. 2012 Remaining or becoming secure: parental sensitive support predicts attachment continuity from infancy to adolescence in a longitudinal adoption study. *Developmental Psychology*, 48, 1277-1282.
- ベネッセ教育総合研究所 2018 乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017 0-1 歳児編 ベネッセコーポレーション
- Biringen, Z., & Easterbrooks, M. A. 2012 The integration of emotional availability (EA) into a developmental psychopathology framework: Reflections on the special issue and future directions. *Development and Psychopathology*, 24(1), 137-142.
- Biringen, Z., Derscheid, D., Vliegen, N., Closson, L., & Easterbrooks, M. A. 2014 Emotional availability (EA): Theoretical background, empirical research using the EA Scales, and clinical applications. *Developmental Review*, 34, 114-167.
- De Wolff, M. S. & van IJzendoorn, M. H. 1997 Sensitivity and Attachment: A Meta-Analysis on Parental Antecedents of Infant Attachment. *Child Development*, 68(4), 571-591.
- Emde, R. N., & Easterbrooks, M. A. 1985 Assessing emotional availability in early development. In W. Frankenburg, R. N. Emde, & J. Sullivan (Eds.). *Early identification of children at risk. An international perspective* (pp.79-101). New York/London: Plenum Press.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E. L., & Target, M. 2002 *The Social Biofeedback Theory of Affect-Mirroring: The Development of Emotional Self-Awareness and Self-Control in Infancy. Affect Regulation, Mentalization, and the Development of the Self.* New York: Other Press LLC.
- 福田佳織・森下葉子・尾形和男 2020 父親・母親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現状況－離乳食場面の観察から－東洋学園大学紀要, 28, 33-44.
- 福田佳織・森下葉子・尾形和男 2022 離乳食場面に見られる親子の相互作用の特徴とアタッチメント安定性との関連性：アタッチメント安定性の高低の子どもとその親のケースの比較 東洋学園大学紀要, 30, 64-75.
- Goldsmith, H. H., & Alansky, J. A. 1987 Maternal and Infant Temperamental Predictors of Attachment: A Meta-Analytic Review. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 55, 805-816.
- 池谷真梨子・柳沢幸 2017 保育所における手づかみ食べに対する取組みの現状と保育士からみた手づかみ食べの意義とその関連要因 日本家政学会誌, 68(2), 70-79.
- International Center for Excellence in Emotional Availability (EA)® Research, Education, and Service.
<http://emotionalavailability.com> (アクセス日：2021年8月23日)
- 蒲谷慎介 2013 歩行開始期乳児の不従順行動に対する母親の調律的応答：歩行不可期における応答との一貫性, 29(1), 34-47.
- 近藤清美・井上望・中野茂・草薙恵美子 2006 アタッチメントに関わる母親の感性概念の検討 北海道医療大学心理学部研究紀要, 2, 13-24.
- Mahler, M., Pine, F., & Bergman, A. 1975 *The psychological birth of the human infant.* New York: Basic.
- Meins, E., Fernyhough, C., Arnott, B., Leekam, S. R., & de Rosnay, M. 2013 Mind-Mindedness and Theory of Mind: Mediating Roles of Language and Perspectival Symbolic Play. *Child Development*, 84(5), 1777-1790.
- NICHD Early Child Care Research Network 2001 Child-care and family predictors of preschool attachment and stability from infancy. *Developmental Psychology*, 37, 847-862.
- NICHD Early Child Care Research Network 2004 Father's and mother's parenting behavior and beliefs as predictors of child social adjustment in the transition to school. *Journal of Family Psychology*, 18, 628-638.
- NICHD Early Child Care Research Network 2008 Mothers' and fathers' support for child autonomy and early

- school achievement. *Developmental Psychology*, 44, 895-907.
- Oppenheim, D., Koren-Karie, N., & Sagi, A. 2001 Mother's empathic understanding of their preschooler's internal experience: Relations with early attachment. *International Journal of Behavioral development*, 25, 6-26.
- Sameroff, A. 2009 The transactional model. In A. Sameroff (Ed.), *The transactional model of development: How children and contexts shape each other* (pp.3-21). American Psychological Association.
- 篠原郁子 2015 Sensitivityの派生概念と子どもの社会的発達—アタッチメント研究からの展望—心理学評論, 58(4), 506-529.
- Smith, P. B., & Pederson, D. R. 1988 Maternal sensitivity, and patterns of infant-mother attachment. *Child Development*, 59, 1097-1101.
- Sroufe, L.A., Egeland, B., Carlson, W.A. 2005 *The development of the person: The Minnesota Study of Risk and Adaptation from birth to adulthood*. New York, NY: Guilford Press.
- Waters, E., & Deane, K. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50, 41-65.
- 高橋靖子・野々部友香 2018 母親の養育態度と乳児期の気質が幼児の不安傾向に及ぼす影響：家庭の雰囲気を経介要因として 愛知教育大学研究報告（教育科学編），67(1)，167-174.